

初期英語における Tough 構文のデータと分析

尾野 理音

1. 導入

本稿では、(1) に例示する tough 構文と呼ばれる構文を扱い、(2) に示す初期英語における当該構文に注目する。

(1) John_i is easy to please ___i.

(2) Bere_i is seiðe earfoðe to geracigenne ___i.

beer is very difficult to make

‘Beer is very difficult to make.’

(ÆChom I, 12 188 4: cf. Wurff (1990: 520))

先行研究である Fischer et al. (2000) は、古英語と中英語における tough 構文を調査し、(3) に例示するような前置詞残置を伴う例が 1400 年代に観察され始めたことを明らかにしている。

(3) John_i is easy to convince Bill to business with ___i.

本稿では、Fischer et al. が調査していない近代英語を含めて歴史コーパスを用いて調査を行い、古英語から近代英語にかけての tough 構文全体の用例数を明らかにし、近代英語においても前置詞残置が見られることを示す。また、前置詞残置の出現に統語的説明を与えることを試みる。

2. コーパス調査

本稿では、YCOE, PPCME2, PPCEME, PPCMBE2 を用いて、(4) に示す tough 形容詞が空所を含む不定詞節を伴う例を抽出した。

(4) difficult, easy, hard, impossible, simple, tough

全体の用例数を表 1 に示し、その中で前置詞残置を伴う用例数を表 2 に示す。

表 1: 古英語から近代英語における tough 構文の用例数

O1	O2	O3	O4	M1	M2	M3	M4	E1	E2	E3	L1	L2	L3
0	7	15	7	17	1	13	11	15	7	12	21	13	28

表 2: 古英語から近代英語における前置詞残置を伴う tough 構文の用例数

O1	O2	O3	O4	M1	M2	M3	M4	E1	E2	E3	L1	L2	L3
0	0	0	1	0	0	0	2	2	0	1	0	1	2

O1 (-850), O2 (850-950), O3 (950-1050), O4 (1050-1150), M1 (1150-1250), M2 (1250-1350), M3 (1350-1420), M4 (1420-1500), E1 (1500-1570), E2 (1570-1640), E3 (1640-1710), L1 (1710-1780), L2 (1780-1850), L3 (1850-1914)

表 1 の結果から、tough 構文は英語史を通じて十分に生産的であったと判断される。また、表 2 の結果から、tough 構文における前置詞残置は O4 に観察された 1 例を除いて M4 以降に観察されようになったことがわかる。O4 に観察された例は (5) に示される。

(5) ... & æghwylce synne þissum gelice þa þæm lichoman bið eaþe in __ to slidenne

and all sins them like that the body is easy in to slide

‘... and all sins like them that is easy for the body to slide in.’

(coverhomL, HomU 15. 1 [Scragg]: 126. 72)

(5) は前置詞残置を伴う tough 構文であるように見受けられる。しかし、本例の出典がラテン語からの翻訳である可能性があること、斜体で強調される動詞 *bið* が校訂を受けていること、この動詞が単数屈折を持つ一方で主語に対応する関係代名詞が複数形であることから、本稿では (5) を例外的であるとみなし、前置詞残置の例として扱わないこととする。したがって、本稿における調査では、tough 構文における前置詞残置の例は 1400 年代から見られるようになり、近代英語でも継続して観察されることが示された。

3. 分析

本稿では、前節で示した tough 構文における前置詞残置の出現は、Tanaka (2007) などに従い、不定詞節の統語構造が 1400 年代に CP へと変化したことがその要因となったと分析する。Tanaka は、(6) に示されるように、古英語における不定詞節の構造は、前置詞としての *to* がフェーズでない vP を補部とする PP であり、不定詞形態素 *-enne* が *to* から与格を付与されて不定詞の外項として機能すると提案している。

- (6) [PP [P to] [VP Venne-v (case, φ) [VP t_V ...]]] (to = P [dative])

↑与格付与

(cf. Tanaka (2007))

Tanaka によれば、不定詞形態素は初期中英語には衰退し始め、その変化に伴って後期中英語には *to* が機能範疇へと変化し、(7) のように不定詞節が CP 構造も持つようになった。

- (7) OE: PP → EME: PP/TP → LME: TP/CP

本稿ではこの提案に従い、(8) のように、1400 年頃までは不定詞節の構造が PP および TP であり、*tough* 構文の主語は不定詞節内から主節主語位置へと直接 A 移動していたと分析する。

- (8) Subj_i be adj [PP/TP to V t_i]

(8) では不定詞節内と主節主語位置で二重に格が付与されているように思われるが、ここでは Tanaka (2014) の分析に従い、当該の時期には能動不定詞節でも受動文の構造を持つことが可能であり、主語は不定詞節内で格を付与されないと仮定する。1400 年頃には *tough* 構文の不定詞節の構造がフェーズである CP へと変化したことにより、主語は転送を避けるために CP の末端へと A バー移動することが要求され、さらなる A 移動が不可能になった。それにより、(9) に示すように不定詞節内には空演算子が生成されて CP の末端へと A バー移動し、表層位置に生成される主語と同定されるようになった。結果として、A バー移動により認可される前置詞残置の例が観察され始めたことが説明される。

- (9) Subj_i be adj [CP OP_i to V t_i]

tough 構文における不定詞節が CP 構造となった証拠として、(10) において斜体で強調される *for* 句を伴う例が 1400 年代に観察され始めたことが挙げられる。

- (10) ... *this is hard for me to sey* __.

this is hard for me to say

‘... this is hard for me to say’

(M4: CMKEMPE-M4, 26. 560)

ここでは Hartman (2011) などに従い、*tough* 構文には *for* 句が 1 つのみ現れ、当該の *for* 句は不定詞節主語であると仮定する。*for* が C 主要部を占めるならば、*for* 句の存在は不定詞節が 1400 年代に CP 構造を持つようになったことを裏付けている。また、さらなる証拠として、(11) のような不定詞節が外置されている例が 1400 年代に消失したことが挙げられる。

- (11) ... he unieðe wære [to gehealdenne __], ...

he difficult were to protect

‘... he was difficult to protect, ...’

(O2: cocura, CP: 52. 409. 19. 2820)

Bruening (2014) に従って分析を行っている Salzman (2023) は、*tough* 構文において空演算子を含む CP 不定詞節は、外置されることが不可能であると提案している。この提案に従い、1400 年代には *tough* 構文における不定詞節が CP 構造となり、空演算子が導入されたことにより、不定詞節の外置が不可能になったと主張する。

参考文献: Bruening, Benjamin (2014) “Defects of Defective Intervention,” *Linguistic Inquiry* 45, 707-719. / Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman and Wim van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English*, Cambridge University Press, Cambridge. / Hartman, Jeremy (2011) “Intervention in *Tough* Constructions,” *NELS* 39, 387-397. / Salzman, Martin (2023) “Experiencer Intervention in English *Tough* Movement: Evidence from Extraction of the *Tough* Adjective against Syntactic- and Semantic-Intervention Accounts,” *Syntax* 26, 223-249. / Tanaka, Tomoyuki (2007) “The Rise of Lexical Subjects in English Infinitives,” *The Journal of Comparative Germanic Linguistics* 10, 25-67. / Tanaka, Tomoyuki (2014) “A Note on Modal Passives in Early English,” *Studies in Modern English* 30, 71-77. / Wurff, Wim van der (1990) “The *Easy-to-Please* Construction in Old and Middle English,” *Papers from the 5th International Conference on English Historical Linguistics*, ed. by Sylvia Adamson, Vivien Law, Nigel Vincent and Susan Wright, 519-536, John Benjamins, Amsterdam.

コーパス: Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia. / Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Lauren Delfs (2016) *The Penn Parsed Corpus of Modern British English*, Second Edition (PPCMBE2), University of Pennsylvania, Philadelphia. / Kroch, Anthony and Beatrice Santorini (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, Second Edition (PPCME2), University of Pennsylvania, Philadelphia. / Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk and Frank Beths (2003) *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose* (YCOE), University of York, York.